

# 松本清張記念館

◆館報◆

2018.12  
第59号

## 松本清張記念館

# 20th

MATSUMOTO SEICHO MEMORIAL MUSEUM

## 記念オブジェ



見る方向によって、清張の顔と数字の20が現れる仕掛けになっています。

3DCAD (Fusion360) を用いてのイメージ作成です。

### 松本清張記念館開館20周年記念 西日本工業大学コラボ事業

本事業は、開館20周年記念事業の一環として、「清張通り」の魅力向上を図る目的で西日本工業大学と連携する中で、提案があったものです。「清張通り」の魅力向上により、松本清張および記念館についての認識と、作家や作品への親しみを持ってもらうことを目指しています。

「清張通り」とは、西小倉駅前から国道3号に至るまでの市道大門木町線を指します。沿道に当館があり、清張の母校である清水小学校校区が含まれることにちなんでいます。

西日本工業大学(小倉キャンパス)は、「清張通り」沿道の大学であり、ちょうど当館の開館前後に生まれた世代である大学生たちが事業の企画・実施をしました。

●詳細は7頁

### 目次

松本清張記念館開館20周年記念講演会	2
開館20周年記念事業	2
企画展「砂の器展」について	4
「砂の器」シネマ・コンサート	5
20周年企画 あふれる想いを	6
ミュージアムショップ新グッズ紹介	6
西日本工業大学とのコラボ事業について	7
友の会活動報告	7
トピックス	8

松本清張記念館 開館20周年記念講演会

講師  
横山 秀夫 (作家)

# 「小説は事実よりも生なり」

平成30年8月4日(土)  
男女共同参画センター・ムーブ  
参加者約三五〇名



## はじめに

松本清張記念館の開館二十周年、おめでとうございます。実は、私も今年で作家生活が二十年になるので、ご縁を感じます。早いもので、清張さんが亡くなって四半世紀が経ちますが、数多くの作品とともに清張さんは私の心の中で生き続けています。ここ数年は、海外の文学フェスティバルなどに出席する機会が多いのですが、そうした席で「セイチョウ・マツモト」の話をすると会場がとても盛り上がりします。清張さんは世界中で愛されている作家なのだと思っていて、次第です。

さて、今日は「小説は事実よりも生なり」という演題に沿ってお話しさせていただきます。

## 新聞記者時代に感じたこと

私はかつて地方新聞の記者として十二年間、ジャーナリズムの世界に身を置いていました。そして小説家になってからの作風が、いわゆる「社会派」なので、世間からは「横山秀夫は記者時代の経験と知識をリユックに詰めて、ひよいと小説家に転身した」と見られがちです。それがまったく的外れだとは言いませんが、私自身の思いは「向こう岸が見えない大きな川を渡って小説の世界に来た」なんです。つまり、ジャーナリズムと小説は同じ書く仕事でありながら、似て非なるものだと考えているわけです。

私はよく「現役時代はどんな記者だったか」「なぜ記者を辞めたのか」といった質問をされます。正直、新聞記者が天職だと思っていた時期もありましたが、五年、十年と続けるうち「自分にはジャーナリストとしての正義感や使命感が足りないのではないか」と感じるようになりました。

事件担当が長かった私は、もっぱら犯罪者を紙面で断罪したり社会の不正を追及したりする記事を書いていたわけですが、果たして自分にその資格があるのだろうかと思いを抱いたんです。それでも、「俺は新聞沙汰になるような事件や問題は決して起こさない人間だ。だから記事を書く資格がある」と自分に言い聞かせて記者を続けていましたが、最後のころには「新聞記者という仕事は、よほどの善人かよほどの悪党でなければ極められない」と思い詰めて辞表を出しました。

私は終身雇用制が当たり前の時代に生まれ育った人間ですから、一つの仕事を全うできなかったという意味で、ジャーナリズムに対する敗北感をいまだに引きずっています。しかし、記者を辞めたのは、「資格」とは別の、もっと大きな理由があ

りました。それは、新聞という媒体が、人の気持ちを伝えるには不向きだと悟ったことです。

## 新聞で「真実」に迫れるか

社会の事象やシステムを分析し、提言したり警鐘を鳴らしたりすることに関しては、新聞は非常に有用なメディアです。しかし人間の内面を正確にくみ取り、それを伝えるという点になると弱点が露呈します。なぜかといえば、新聞は客観報道を旨としているため、取材相手が実際に言葉にしたことしか記事にできないからです。仮に、相手の発言が「本心ではない」と記者が強く感じたとしても、それを書くことは許されなわけです。



結局、紙面には取材相手が発言したことが載り、それが世間でも「事実」になっていきます。こうした「事実」をいくら積み上げたところで、本当の意味での「真実」には到達できないと、十二年間の記者生活で痛感しました。それはまた、私の心の中に「事象ではなく人の気持ちを書きたい」という渴望があることを教えてくれました。

新聞記者を長くしていると、何事においても「真実は一つ」という脅迫観念の虜になります。それは尖った鉛筆の芯が打つ「点」を追い求める作業です。しかし、人の心理に限って言えば、それは当てはまりません。なぜなら、人の心は「点」ではなく「面」であり、さまざまな「滲み」や「グラデーション」を伴っているからです。それこそが私の書きたいことだったんですね。

### 小説を書くにあたって

子供時代の私は「本の虫」でした。図書室にある国内外の児童文学を片端から読み、それでは飽き足らず、自分で「続編」を書いて友だちに読んでもらったりしていました。「物語」に対する信頼感は、そのころに醸成されました。架空の話でありながら、ある意味、現実以上にリアルな世界に私を連れていってくれました。今、その理由を言うなら、小説には普遍性をもった「人の正直な気持ち」が書かれているからです。

だからといって、正直な気持ちであれば何でも書いて良いとは言えません。私は小説家としてデビューした時に幾つか誓いを立てました。そのひとつが「小説で社会に復讐してはいけません」。誰だって生きていけば、怒りや嫉妬や憎しみの感情が芽生えることはあるでしょう。厄介なことに、そうした負の感情は、良い感情よりも強いエネルギーを持っていきます。それをそのまま世の中におつけたものを小説とは呼べません。確かに小説を書くためには、正にしろ負にしろ、執筆動機となるエネルギーが不可欠ですが、それをいったん自分の中で循環させ、しかるべき昇華をもたらす浄化システムを持たねばなりません。小説は結果として、「誰かのため」「何かのため」になることはありますが、始めからその目的をもって書く行為は、文章を濁らせ、物語が持つ可能性を狭めてしまおうと考えるからです。

### 想像が現実世界をつくる

もうひとつ、私が小説を書く上で出発点に据えているのが、「私以外の人は、すべて私の想像の産物である」という考えです。これは小説世界の話ではなく、現実社会のことです。普段接している人たちのことを、自分はどれだけ知っているかという問い掛けです。

例えば、私たちは初対面の人と接する際、相手のことをとても注意深く観察します。相手がどんな人かわからないので不安でならず、「一刻も早く「この人はこんな人」とラベルを貼って安心したいからです。ところが少し親しくなると、途端に観察を怠るようになる。もちろん、会えば時折新たな発見があり、人物像を軌道修正していくわけですが、発見は所



詮「点」であり、これまで集めた「点」のどれと繋ぐかによって相手の見え方はまるで違ってきます。よく「人は自分の見たいものだけを見る」と言われますが、人間関係もまったく一緒で、相手の人物像は自分が望むように作り上げていると言っても過言ではないと思います。

こうして見ていくと、私たちがリアルだと信じているこの世界は、実のところ膨大な想像で埋め尽くされていることに気がつかれます。ある瞬間の人の気持ちは捉えることができません。人の連続した心の動きは、想像で補完するしかないということです。これは夫婦や親子であろうと例外はなく、どれほど多くの相手の「点」を把握していても、その隙間で起こる小さな心の変化を完全にトレースできると考えるのは幻想に過ぎません。

### 小説は事実より：

私の書く小説には、主人公が相手の内面を探ろうとして見誤ってしまう場面がよく出てきます。彼らも頭では自分とは異なる様々な人生や心模様があると理解しながら、いざ相手の気持ちを想像するとなると、自分一人の人生経験で培ったものさしを当ててしまいます。ですから物語のラストで明らかになる相手の気持ちと、主人公の想像が食い違う。その食い違い、すれ違いこそが「ミステリー」なのだと思っています。「64(口クオン)」は原稿用紙千四百枚の長編ですが、その大部分は主人公の内面描写で占められています。読者が虚構である小説を欲し続ける大きな理由として、一人の人物の心の動きが連綿と綴られていることが挙げられると思います。先述したとおり、それを知ることが現実世界においては大変困難なことだからです。小説は、現実という「フィクション」を「ノンフィクション」に変えていく行為だという見方もできるかもしれません。

私が新聞記者と小説家の両方をやった経験から申し上げますと、情報というものは時とともに例外なく散逸するが、物語は時を超えて人の心に留まり続ける。そう信じて小説を書いています。

松本清張記念館 開館20周年記念  
特別企画展

# 松本清張 砂の器 展

平成30年 12月18日【火】—平成31年 3月31日【日】  
松本清張記念館 企画展示室

「砂の器」は、松本清張が1960(昭和35)年から約一年間「読売新聞」に連載した長編推理小説です。遺体で発見された男が前夜残した「東北訛の『カメダ』」という言葉から捜査が展開していく物語は、何度も映像化され、今も読まれ続けています。映像化作品のなかでも、映画「砂の器」(野村芳太郎監督、1974年、松竹)は、原作者である松本清張自身も高く評価しており、公開から四十年以上が経った今も人気を誇る日本映画のひとつとなっています。本展では、小説と映像とで愛され続ける「砂の器」の魅力を再発見します。



「砂の器」連載第一回紙面(「読売新聞」昭和35年5月17日夕刊)



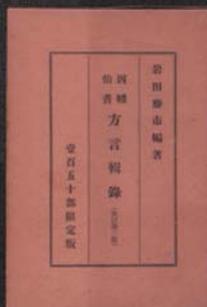
「球形の荒野」原稿

「砂の器」は1960(昭和35)年5月から約一年間連載されました。初めての小説「西郷札」執筆から約10年、作家としての脂ののった時期でした。執筆量の限界に挑戦したいと、現在も読みつがれる「日本の黒い霧」や「球形の荒野」など数多くの作品を執筆しました。

## 1 小説「砂の器」 執筆当時の松本清張

## 2 小説「砂の器」

「砂の器」執筆にあたり、清張は多くの資料を参照し、取材を行い、小説に活かしました。遺された参考資料から、小説の構想の一端をうかがい知ることができます。



清張日蔵  
「因幡伯耆方言輯録」  
(昭和13年)



振り出し探題  
(亀嵩算盤合名会社所蔵)

## 3 映画「砂の器」

映画「砂の器」は1974(昭和49)年に発表され、たちまち話題となりました。何度もリバイバル上映され、その人気は海外にもおよびました。



映画「砂の器」ポスター

## 4 「砂の器」の作品世界

小説「砂の器」の中には、昭和三十年代の日本の姿が息づいています。

映画「砂の器」出演女優の島田陽子さんが、12月18日(火)に行った、オープニング式典に参加して下さいました。

松本清張記念館 開館20周年記念事業

# 「砂の器」シネマ・コンサート

スクリーンでの映画全編上映×フルオーケストラによる全曲生演奏



開館20周年記念事業の一環として、11月25日(日) 北九州芸術劇場 大ホールにて、映画『砂の器』シネマ・コンサートが開催されました。

シネマ・コンサートとは、スクリーンで映画本編を上映し、セリフや効果音はそのままだに、劇中に流れる音楽の部分を生で演奏するものです。

映画『砂の器』は、清張原作の同名小説を1974年に野村芳太郎監督らが映画化した作品ですが、シナリオのすばらしさや映像の美しさ、そして丹波哲郎や加藤剛、緒形拳といった往年の名俳優らによる演技も相まって、今日でも高く評価されています。

昨年からスタートしたこの『砂の器』シネマ・コンサートは、これまで東京・大阪のみで開催されてきました。今回は九州初公演ということもあり、8月より販売を開始した前売り券も早くに完売、数限られた当日券を求めて並ぶ方々の列が会場前に伸びるなど、開演前から皆様のおふれんぼの期待や熱意が伝わってくる状況でした。

当日、ホールは約1,200人の観客で埋め尽くされました。会場正面の大スクリーンには、デジタル修復により美しく鮮やかに蘇った映像が映し出されました。そしてそのすぐ下の



ステージからは、幅広いフィールドで活躍し作曲家としても有名な和田薫氏による指揮のもと、国内外で数々のリサイタルを成功させてきた経験を持つピアニストの近藤嘉宏氏と九州唯一のプロオーケストラであり60年以上の歴史と実力を誇る九州交響楽団の生演奏によって、劇中音楽が見事に響きわたりました。

この上映形態は、まさに映画と音楽、両方の感動を同時に堪能できるものであり、特に後半で親子が放浪の旅を続けるシーンでは、会場のあちこちからすすり泣きも聞こえてきました。そして終演を迎えても、会場では大きな拍手がなかなか鳴りやみませんでした。

清張ファンの皆様はもちろんのこと、映画や音楽の愛好家の方々にもたくさんご参加いただきました。終了後のアンケート等でも、大変多くのご好評が寄せられました。





# あふれる想いを… 7

今回は松本清張記念館建設時に、北九州市教育委員会文化振興課長としてご尽力され、その後も様々な形で記念館にかかわっていらした柏木修さんに、建設当時の苦労や思い出について寄稿していただきました。



(公財)北九州市芸術文化振興財団  
理事長 柏木 修氏

## 『清張記念館の思い出』

### 【清張記念館との関わり】

私は平成5年4月に教育委員会の文化振興課長に就任しました。松本清張記念館の建設については、清張さんが平成4年8月に逝去された直後から松本家に記念館建設を協力依頼したり、誘致建設委員会の設置を発表するなど北九州市として異例のスピードで取り組んでいました。

その間、まずは北九州市東京事務所が中心となって、様々な動きをしていました。私も麹町にあった東京事務所の近くの文藝春秋社の藤井康栄さんや清張さんの長男の松本陽一さんが勤めていた電通などに東京事務所と一緒に事務連絡やご挨拶に出掛けたことを懐かしく、思い出します。

文化振興課はソフト事業で建設の機運を盛り上げるべく平成5年9月には第3回北九州市文化の薫るまちづくりシンポジウム「松本清張と北九州」を開催。平成6年9月には、文藝春秋社と共同で「松本清張展」を小倉・井筒屋を皮切りに大分、東京、仙台で開催することに携わったのもいい思い出です。

平成9年4月から平成13年3月までは教育委員会の総務課長、その後、生涯学習部長、総務部長として清張記念館建設担当組織の新設や清張記念館の予算や職員の配置などに関わりました。

平成16年4月から経済文化局長、平成20年4月からは教育長に就任し、平成21

年1月からの松本清張生誕100周年記念事業の責任者として、携わりました。

このように私の市役所生活の中で清張記念館はオープンから今日まで様々な形で関わってきた思い出深い文化施設です。

### 【清張記念館建設に思うこと】

物事がうまく出来上がるときには、何故か天の時、地の利、人の和が必ず備わっているように思えてなりません。松本清張記念館の建設も将にその好例でしょう。

松本清張さんが逝去後、スピーディーに行政や北九州青年会議所など官民挙げて、記念館の建設に向けて動き出しました。それに加えてナヲ夫人、長男の陽一さん、文藝春秋の藤井さん、小野家の皆様の協力など人の和が記念館をふるさと小倉の地に建設できた大きな要因でしょう。

清張さんはふるさと小倉が嫌いだったという方がいますが、母校の天神島小学校(小倉小学校を経て、現在の小倉中央小学校)へグランドピアノの寄贈、中央図書館に膨大な自著の寄贈、北九州青年会議所主催の講演会の依頼を快く引き受けて、小倉市民会館での講演会に出席するなど、紹介するだけでも故郷への思慕の念の深さがわかると思います。因みに母校の天神島小学校に寄贈されたピアノは教育委員会挙げて探しましたが、学校統合で廃校になったこともあり、結局、わかりませんでした。懐かしい思い出です。

記念館の中に屋根のある清張さんの自宅を再現して、応接間、書斎、書庫などの本物を納めるアイデアにはびっくりしました。

時々、建設の途中を拝見しに出掛けましたが、共産党と創価学会の歴史的な会談が為された応接間や煙草で焦げた書斎など作家の創作の場を直接、それも誰よりもいち早く見た感激は今でも忘れません。

### 【記念館へのエール】

清張記念館が平成30年に開館20周年を迎えたとのこと、誠におめでとうございます。

清張記念館建設の際、人の配置や予算などに関わる行政的な課題は、研究機能をどうするかでした。やはり、研究機能を付加することで記念館の活動に厚みが出来たことは確かでしょう。

併せて、ナヲ夫人の寄付で松本清張研究奨励事業も始まったことは大変、素晴らしい出来事でした。

清張記念館のこれからは、研究機能も含めた20年の蓄積を次にどう活かしていくかが課題でしょう。

関係者の皆様の奮闘を期待しています。

## ミュージアムショップの新グッズ

紹介

記念館・地階ミュージアムショップには、清張の本や、当館発行の研究誌・図録はもちろんのこと、ちょっとしたお土産物もあります。

今回は、今年新たに入ったグッズをご紹介します。

**ブックカバー、キーホルダー、豊前小倉藩特産「小倉織」**

どれも大変好評を得ています。

記念館に来たらぜひミュージアムショップを覗いてみてください。

キーホルダー



ブックカバー



▲豊前小倉藩特産「小倉織」

# 西日本工業大学コラボ事業

- I. 西日本工業大学の学生(趙彦研究室)による、オブジェ作成と展示。
- II. 開館20周年記念事業に関するデザインのプレゼンテーション(ポスター発表)

**日時** 平成30年8月27日(月)～10月31日(水)

**場所** 松本清張記念館 I. 2階 オープンスペース II. 地階 休憩コーナー  
《協力》株式会社アダチ



▲ 地階休憩コーナー展示



▲ 2階 オープンスペース展示  
趙准教授と学生、株式会社アダチと当館のスタッフで、協力して設営しました。

## 開館20周年記念事業に関するデザインのポスター発表

西日本工業大学 デザイン学部 情報デザイン学科(趙彦研究室)の学生による、記念事業の企画・デザイン案を展示しました。

「松本清張が作り出した世界観を本を読まずに体感しよう」というコンセプトのもと、①松本清張像、②松本清張エピソード像、③松本清張記念の20周年のポスター、④松本清張の作品板、⑤松本清張バナーデザインが提案されました。

これをもとに、松本清張像をオブジェとして、バナーデザインをしおりとして制作し、展示を行いました。しおりは、ブックカバーとともに新たなデザインも加えられました。好評につき、一部はミュージアムグッズとして製品化も検討しています。

\*\*\*\*\*

## 友の会 活動報告

\*\*\*\*\*

### ● 平成30年度年次総会・懇親会

平成30年8月4日(土) 参加者22名  
北九州市男女共同参画センター・ムーブ 5階

横山秀夫さんによる開館20周年記念講演会の後、平成30年度友の会年次総会を開催しました。前年度の事業報告及び決算、役員選任、新年度の事業計画及び予算等の審議が行われ、拍手をもって承認されました。懇親会は、総会終了後に会場を小倉リーセントホテルに移して行いました。横山秀夫さんご夫妻にもご参加いただき、和やかな懇親会となりました。

### ● 清張サロン 記念館 企画展示室

7月に開催した第5回(29年度)清張サロンは、「『西郷札』を読む」と題し、九州大学大学院教授の松本常彦先生を講師に、執筆した当時の背景や、作品を構成する要素を読み解き、丁寧に解説していただきました。

また、平成30年度の第1回清張サロンは、記念館の柳原学芸員を講師として、開催中の特別企画展「清張オマージュ展」をテーマに開催しました。展示の見どころや開催準備の裏話などについての説明があった後、展示を観ながらの解説を行いました。

第5回(29年度) 7月14日(土)14時～16時 参加者84名  
●場 所：松本清張記念館・企画展示室  
●講 師：松本常彦氏(九州大学大学院教授)  
●テーマ：「西郷札」を読む

第1回(30年度) 9月27日(木)14時～16時 参加者34名  
●講 師：柳原 暁子(記念館学芸員)  
●テーマ：「清張オマージュ展」

### ● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日～翌7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申込は、松本清張記念館友の会事務局まで  
**TEL.093-582-2761**

### ● 秋の文学散歩

バスハイク：「点と線」香椎探訪と清張ゆかりの名宿でひとときを

10月17日(水) 参加者23名(事務局含む)  
●訪問先：西鉄香椎駅前「清張ゆかりの桜」記念碑、大丸別荘、武蔵寺、天拝山歴史自然公園

「点と線」の舞台の香椎には「清張ゆかりの桜」と記念碑があり、地元の方が保存活動に取り組んでいます。また、二日市温泉にある旅館・大丸別荘は清張も滞在したことがあり、菅原道真の故事でも知られる天拝山は、小説「夜光の階段」の舞台にもなりました。

香椎で地元の方と交流したあと、老舗旅館で少しリッチな昼食をいただき、楽しいバスツアーとなりました。

ツアー：「砂の器」亀嵩と山陰を巡る旅

11月5日(月)～6日(火) 参加者25名(事務局含む)  
●訪問先：亀嵩駅、湯野神社・砂の器記念碑、酒蔵奥出雲交流館、石霞溪 日南町総合文化センター、清張文学碑、松江城堀川めぐり、由志園、一畑薬師、足立美術館

今年の秋の文学散歩は、開館20周年を記念して例年のバスハイクに加え「砂の器」の舞台ともなった亀嵩や清張の父の出身地である鳥取県日南町、また松江城の堀川めぐりや足立美術館などを巡りました。

亀嵩では、清張と親交があり9月に急逝された亀嵩算盤・若槻慎治さんのご子息・昭宏さんに「清張と若槻家のご縁など」について講話をいただくとともに、「砂の器」について、長崎外国語大学教授・加島巧氏からレクチャーを受けました。松本清張文学展示室がある日南町総合文化センターや、松本清張文学碑を訪ねるなど、天気や紅葉にも恵まれ、大変有意義な山陰の秋のツアーとなりました。



文学散歩(清張文学碑)



文学散歩(香椎駅前 清張ゆかりの桜石碑)

## 松本清張記念館

第20回

松本清張研究奨励事業  
入選企画決定

「松本清張研究奨励事業」は20回目を迎えました。選考委員会による厳正な審査の結果、次の2点の研究企画が入選しました。清張が最晩年に取り組もうとしていた“米軍占領下の日本で暗躍したある女性”に関する研究と、韓国における清張作品の翻訳や受容について網羅的・体系的に調査する研究であり、共に成果が期待されます。

**企画名** 松本清張、未完の仕事  
—《荒木光子の戦後史》

**入選者** 北原 恵 (大阪大学文学研究科教授)

**企画名** 松本清張文学の韓国における  
翻訳現況と特徴

**入選者** 代表 金宰奭 (韓国・慶北大学校教授)



## 講演に行ってきました

平成30年度も、松本清張の魅力をより多くの皆様お届けするために、清張の人物や作品、北九州への想いなどをテーマに講座、講演を行っています。今年度上半期の講演実績です。

日付	主催者・会場等
4/26	北九州文化懇話会(松本清張記念館)
5/25	朽網市民センター
7/14	赤崎市民センター
9/4	黒崎市民センター
9/13	添田町立図書館



イラスト:山藤 章二

編集・発行

## 松本清張記念館

〒803-0813  
北九州市小倉北区城内2番3号  
TEL 093 (582) 2761  
FAX 093 (562) 2303  
http://www.kid.ne.jp/seicho  
制作 (株)ハーティブレーン

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)  
小学生/200円(160円) ( )は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分  
小倉からはバスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館下車)  
車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分

第21回 松本清張研究  
奨励事業募集

## 募集要項

- 対象** ① 松本清張の作品や人物を研究する活動  
② 松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)  
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンルは問いません。ただし、未発表に限り、個人又は団体も可。
- 内容** 入選者(団体)に120万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法** 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成31年3月31日までに応募してください。

※詳しくは、ホームページをご覧ください。また、記念館までお問い合わせください。



- 編集後記● 開館20周年の年が終わります。20年の重みを感じつつ、その間に携わった方々に感謝しつつ、事業を進めさせていただきました。

様々な分野のみなさまにたくさんのお力添えをいただいた一年でした。ありがとうございました。

20周年記念事業の最後は、特別企画展「松本清張『砂の器』展」です。12月18日(火)から、平成31年3月31日(日)までです。みなさまのお越しをお待ちしております。(K.H)

